

評価のポイント

CL-1.看護実践能力：ニーズをとらえる力 [9-1] 日常生活自立度の評価方法とケアへの関連付け

1. 既往に脳梗塞、右麻痺のある患者が胃がん手術目的で入院。入院時は杖歩行可能で、日常生活動作もほぼ自立している。入院時の障害高齢者の日常生活自立度ランクは何か？また、術後、日常生活自立度をさげる可能性のある要因をあげ、どのようなケアが必要か？

Ans.入院時：杖歩行可能、日常生活動作もほぼ自立

右麻痺はあるが、杖の使用により日常生活動作はほぼ自立していることから障害高齢者の日常生活自立度は「ランクⅠ」となる。患者の外出範囲（交通機関を利用できるか、隣近所の範囲での外出か）により判定に必要な情報が必要となる。

術後、日常生活自立度をさげる可能性のある要因をあげ、どのようなケアが必要か？

Ans.術後、どのような要因が自立度ランクを下げてしまうのかを予測し、配布資料：スライド16、スライド29を参考に事例の患者を「寝たきりにさせないために」多角的側面から必要なケア（介入）は何かを考える。（以下回答例）

- ・創部痛：痛みがコントロールされないことで早期離床ができず、それが筋力の低下や転倒転落、せん妄などの要因とも複雑に絡み合うことが考えられる。鎮痛剤の投与、効果評価により痛みのコントロールを図る。
- ・褥瘡：ベッド上で過ごす時間が長くなるため、体位変換や体圧分散マットレスの使用、患者の体動状況や体格により必要な褥瘡対策を講じる。
- ・身体症状（嘔気、腹部膨満など）：身体の苦痛症状によりベッド上で過ごす時間が長くなる可能性もある、術後合併症の早期発見、苦痛緩和のための約束指示の投与、安楽な体位調整などにより苦痛の緩和を目指す。
- ・せん妄：せん妄による身体拘束や鎮静剤の使用、治療への協力が得られないなど早期回復遅延や体力・筋力低下→転倒転落につながる可能性もあるため、せん妄リスク因子の介入・予防ケアが必要となる。
- ・体動制限（痛み以外）：ドレーン類など挿入されているデバイスがあることで、体動が制限される（制限してしまう）可能性もある。ドレーン固定の確認、ドレーン管理に関する患者教育も必要となる。
- ・低栄養：胃癌に対する手術であるため、術後の食事摂取状況や合併症、体重減少などから筋力・体力の低下、易疲労なども考えられる。栄養状態の評価、必要時はNSTへ相談する。

2. 認知症と診断された患者が急性胆管炎（胆嚢ドレーン留置）で大部屋に入院。ドレーン留置中であることを説明すると「はいはい」と返事はあるが忘れてしまう。日常生活動作は自立しているが、トイレに行くと自分の部屋が分からなくなってしまう。この患者の認知症高齢者の日常生活自立度ランクは何か？この患者にどのようなケアが必要か？

Ans.

- ・ドレーン留置中であることを説明すると「はいはい」と返事はあるが忘れてしまう
- ・日常生活動作は自立している
- ・トイレに行くと自分の部屋が分からなくなってしまう

→入院生活に支障をきたすような症状はみられているが、日常生活動作は自立しており、医療従事者が注意をしていれば入院生活を過ごせることから認知症高齢者の日常生活自立度ランクは「ランクⅡ」となる。

どのようなケアが必要か？

ans.

この患者にとってどのような要因が認知症高齢者の自立度ランクを下げてしまうのかを予測し、配布資料：スライド29を参考に事例の患者を「認知症を悪化させないために」多角的側面から必要なケア（介入）は何かを考える。（以下回答例）

- ・痛み：腹痛やドレーン刺入部痛などの痛みがコントロールされないことで、活動量の低下や不眠となることも考えられる。それが、筋力の低下や転倒転落、せん妄などの要因とも複雑に絡み合うことで認知機能へも影響することから鎮痛剤の投与、効果評価により痛みのコントロールを図る。
- ・身体症状（嘔気、腹部膨満など）：身体の苦痛症状が適切に表現できないことも考えられ、それが不安の助長、不眠やせん妄などの要因とも複雑に絡み合うことで認知機能へも影響することから、身体症状の有無を観察し、起こり得る苦痛への対応を行う。
- ・せん妄：せん妄発症による身体拘束や鎮静剤の使用、治療への協力が得られないなど早期回復遅延や体力・筋力低下→転倒転落につながる可能性もあるため、せん妄リスク因子の介入・予防ケアが必要となる。
- ・ルートトラブル：ドレーン類など挿入されているデバイスの認識が難しいことから、計画外抜去により身体症状の悪化、入院期間の長期化につながることも考えられるため、ルート固定の工夫、ルートが保護されるような衣服の工夫など管理方法の検討が必要となる。
- ・転倒転落：環境の変化やルート類留置に伴い転倒転落リスクがある。認知症高齢者の日常生活自立度判定基準により判定したランクから、安全な入院環境の提供も必要となることから、医療従事者が見守りやすい部屋の配置、トイレから迷わず戻ることができるような目印の設置など不安を助長させないようなケアの工夫も併せて検討する。